



榎木 一秀氏
(長手ホールディングス社長)

内航海運や陸上輸送をグループで手掛ける長手ホールディングス（神戸市中央区）の榎木一秀社長は「グループの力を束ね、モーダルシフトを見据えながら、顧客に最適な物流を届けることが私たちの使命だ」と語る。

同社グループの成長戦略を読み解く鍵は、「コアコンピタンス」の強化と「両利き経

『『コアコンピタンス』と『両利き経営』』

営」にある。コアコンピタンスとは、競合が容易に模倣できない、差別化された独自の価値を指す。

グループ企業で利用運送業のシー・リンクは、プリンス海運やシー・ラインとの連携で独自の存在感を発揮している。シー・リンクは、プリンス海運との連携で安定した船腹を確保し、競争力ある海上運賃を実現してきた。

さらにシー・ラインとの協業により、首都圏をはじめとする陸上輸送まで一貫対応できる体制を整えた。全国の船会社や陸送会社とのネットワークも生かし、海運と陸送を組み合わせた最適な物流を提案できる点が強みだ。

一方、船舶や車両を過度に抱え込まないアセットライト型の事業モデルにより、需要変動にも柔軟に対応する。主要港に営業拠点を置き、迅速な配船や輸送手配につなげる現場力も、収益基盤を支える。榎木社長は「現場の判断力とネットワークこそ、当社の競争力を支える土台になる」と強調する。ここに同社が目指す本当の意味でのグループ協業がある。

今後は両利き経営を念頭に、既存事業を磨く「知の深化」に加え、物流DXなど新たな分野へチャレンジしていく「知の探索」も欠かせない。アナログの現場力とデジタル技術を融合し、プリンス海運とシー・リンクのシナジーをさらに高めていく。

榎木社長は「守るべき強みを深めながら、新しい事業の芽も育てていく」と先を見据える。守りと攻めを両立する両利き経営こそ、変化する物流市場で同社が持続的に成長するための羅針盤となる。

(斎藤 雄輝)